

未完の地図：森崎和江と沖縄闘争の時代

大畑，凜

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

48

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025475>

未完の地図

——森崎和江と沖縄闘争の時代——

大畑 凜

はじめに

一九六七年の日米首脳会談をひとつのメルクマールとして、沖縄の施政権返還が日米両政府にとっても既定路線となり、六九年の日米共同声明によつて七二年の施政権返還は正式決定された。一方で、ベトナム戦争の激化や〈本土復帰〉をめぐる矛盾の露呈によつて、六〇年代後半からの祖国復帰運動（以下、復帰運動）も大きな質的転換を迫られ、〈反復帰〉の潮流が沖縄のなかから現れるようになる。この沖縄闘争の時代において、日本（本土）でも沖縄の施政権返還Ⅱ（〈本土復帰〉）にたいする議論は急速に活発化していった。

そこでは数多の沖縄論が交わされたものの、七〇年安保とあわせてこれを時流的な課題と捉えた議

論も少なくなく、現在でも再読に耐えうる射程をもちあわせたものは一部のものに限られる。それゆえ、この闘争の季節をめぐる日本の知識人や思想家の言説を取り扱う先行研究も、近年一定の成果があるとはいえ、⁽¹⁾戦後沖縄思想史研究の近年の興隆とは比較できるようなものではない。

詩人・批評家であり、植民地朝鮮で生まれ育った植民二世として朝鮮への思想的な発言で知られる森崎和江もまた、一九六九年から七一年という限られた時期のあいだに、いくつかの沖縄論を書き残している。直接の沖縄論の数はやや限られるとしても、ひとつのテクストのなかに複数の主題を混成させるその特徴ゆえ、同時代に書き記された森崎の文章群にはいたるところに、闘争の季節を迎えた沖縄にたいする言及が見受けられる。これは、みずからが終世の思想課題とした朝鮮（半島）にたいしてですら、同時代の政治的状况にかんしては時事的な発言をほとんどしなかった森崎には異例のことで、その思想変遷上でも特筆に値する出来事だった。

だが、森崎の沖縄論はそれ単独では、既存の森崎和江研究や戦後沖縄研究でもほとんど考察の対象とはなつてこなかった。そのなかで水溜真由美は、森崎が当時メンバーであった「おきなわを考える会」(以下、「会」)の活動を聞き取りを交えながら調査し、いわば社会運動史的な文脈から「会」と森崎の接点を押さえた重要な研究を残しているが、一方で森崎の沖縄論にたいする踏み込んだ考察はなされて⁽²⁾いない。また山本真知子も、沖縄の社会運動研究の文脈から森崎の沖縄論に注目するが、研究ノートということもあり内容はおおまかな紹介にとどま⁽³⁾っている。

これらは単に後世の研究史上の傾向というだけでなく、同時代においても、森崎の沖縄論は沖縄の論壇や思想家たちからはほとんど注目されてこなかった。しかし、本文で詳しくみていくように、森崎の直接の沖縄論が掲載された企画・特集にはいずれも著名な同時代の沖縄の思想家たちが同じく寄稿している。また、『サークル村』⁽¹⁾で活動をもにした上野英信や森崎の元パートナーでもあった谷川雁が沖縄においても広く読まれ⁽²⁾、両者が残した沖縄にかかわる著作や文章も——どちらも主に一九八〇年代に書かれたものだが——一定読み継がれてきたことを考えれば、森崎の沖縄論が当時も現在も一貫して見過ごされてきたのはやや奇妙にも映る。

そのうえで本稿は、森崎の思想変遷上で重要な位置を占め、当時沖縄でもまったく読まれていなかったとは考えにくいその沖縄論が、当時も現在も十分に顧みられてこなかった理由を探りながら、なおそこに、いかなる実践的・思想的な射程が込められていたかを読み解くものである。その際に重要なのは、森崎が、当時拠点としていた福岡の炭鉱地帯・筑豊と沖縄闘争をどのようにして結びつけようとしていたかだ。当時、日本（本土）と沖縄を架橋しようとする言説や運動はさまざまにあり、多くの活動家や知識人、ジャーナリストたちは時に渡航制限を受けながらも沖縄に渡り、〈現地の声〉をそれぞれに書き連ねた。一方で、当時の森崎はさまざまな事情から頻繁には長期の外出ができず、沖縄に初めて渡ったのも施政権返還後数年が経ってからのことだった。これらの点で森崎の沖縄論は一定の制約を受けたものだったが、だからこそ、日本（本土）と沖縄をいかに架橋するのかという命

題にたいし独自の方法を提起してもいた。このことは単に研究史上という観点からのみならず、施政権返還から間もなく五十年を迎える現在も、米軍基地問題を筆頭にさまざまな形で政治的断絶が表面化している日本（本土）と沖縄の関係を再考するうえでも、重要な示唆を与えるものである。

以下本文では、第一節で森崎がみずからの沖縄論の足がかりとした「会」の活動とその理念についてみていく。つづいて第二節では、森崎の沖縄論を具体的に検討していきながら、その論の基本的な性格と問題点を、同時代の沖縄と日本の思潮を参照しながらあきらかにする。そのうえで第三節では、森崎の沖縄論がもつ可能性を、〈節合〉を鍵に読み解いていくが、その先には、沖縄を通じて森崎が描き出すひとつの抵抗の地図が現れることも併せて論証する。

一 「おきなわを考える会」の沖縄闘争

本節では、森崎和江がその立ち上げからかわった「おきなわを考える会」の一九六九年から七一年にかけての活動とその理念についてみていくが、まずここでは当時の福岡をめぐる社会運動の状況に簡単にふれておきたい。

この当時、福岡という単位でみれば、沖縄闘争にも接続しえる可能性をもった運動が散見される。その代表的なものが、山田弾薬庫輸送阻止闘争と板付基地撤去闘争である。前者は、北九州市小倉区にある米軍山田弾薬庫への弾薬輸送を直接行動などによって阻止しようとする闘争であり、一九六八

年四月から七月にかけて北九州反戦青年委員会などを中心に取り組まれた⁽⁷⁾。後者は、山田弾薬庫の弾薬の補給先でもあった福岡市の米軍板付空軍基地をめぐり、一九六八年六月二日、米軍嘉手納基地に所属するファントム機が九州大学箱崎キャンパスに建設中の電子計算センターに墜落した事故を機にはじまった闘争である⁽⁸⁾。

戦後、幾度となく死亡者を出すような墜落事故を起こしてきた板付基地には、ベトナム戦争の開始とともに米軍機の飛来が増加していた。上記した問題はともにベトナム戦争と直結している点で、直接的にも間接的にも、ベトナム戦争時の米軍の出撃基地であった沖繩ともかわる質のものであった。当時の運動体にこれらの問題を沖繩と結びつける認識があったか否かは別としても、各地域の反戦青年委員会やノンセクト、ベ平連、新左翼各党派らがかわつていたこれらの闘争は、当然「会」のメンバーや森崎も見聞きしていただろう。「会」に集うメンバーたちがのち筑豊に反戦共闘を設立したり、森崎の『サークル村』・『無名通信』⁽⁹⁾以来の盟友であった河野信子が、基地返還がなされる七二年まで毎週土曜日に板付基地前で座り込み活動をおこなうなど、⁽¹⁾いずれの運動・闘争も「会」や森崎に近い距離でおこなわれていたはずのものである。

だが、「会」としてのこうした問題への提言や取り組みは確認できず、これは森崎においても同様である。他方でこの時代は、日本（本土）の各地でも沖繩闘争に取り組む多様な実践が現れ出しており、〈沖繩問題〉を彼方の問題ではなくみずからの課題としても捉える見方が広がりつつある時代で

あって、本土就職で渡ってきた沖縄出身の若者の労働問題に取り組むグループが大阪に存在するなど、みずからの足下にある沖縄問題が発見されることで、沖縄闘争もまた独自に拡張されつつあった。⁽¹²⁾以下にみていくように、筑豊および隣接する北九州から沖縄闘争に取り組もうとした「会」もまたこうした潮流のひとつと考えられるが、「会」によって選ばれた課題が、より明示的に沖縄と結びつくはずの福岡の基地問題でなかったところに、「会」のひとつの特徴がみてとれる。

一九六九年四月、「会」は機関紙『わが「おきなわ」』の発刊とともに発足した。森崎宅に出入りしていた『サークル村』→大正行動隊⁽¹³⁾以来の活動家や、若い労働者、地元青年団員などを中心に立ち上げられたこのグループは北九州にアジトを構えつつ、筑豊―北九州を基盤に活動していった。⁽¹⁴⁾当面の目標とされたのは映画『沖縄列島』（一九六九年、監督・東陽一）の自主上映であり、⁽¹⁵⁾「会」はこの実現に向けて機関紙での呼びかけだけでなくパンフレットの発刊などもおこなっている。

ここで、「会」の活動の中心であった『わが「おきなわ」』の基本情報を確認しておくと、当初は月刊で発行された雑誌（ミニコミ）で、一号まで発行された。雑誌の頁数は号によってまちまちであるが、少ない時で一〇頁前後、多い時は二〇頁を超える程のボリュームだった。執筆の中心は「会」のメンバーであるが、メンバー以外の寄稿も散見される。五号（一九六九年八月）までは無記名の記事が大半だったが、六号（一九六九年十一月）からは記名付きとなった。内容としては、雑誌の巻頭に「おきなわを考える」というコーナーが設けられることが多く、みずからの沖縄と向き合う姿勢が

それぞれ表明されている。また、筑豊の合理化以降の様子にふれたものでなく、「職場掲示板」や「陥没する北九州」といったコーナーをはじめ北九州の労働問題の実情を報告する記事が多いのも特徴である。このほか、『沖縄列島』の自主上映開催まではこれに関連する記事もあり、琉球新報の記者であった近田洋一による沖縄からの現地報告の体をとった連載記事も存在した。なお、この雑誌のなかで森崎が執筆した記事自体は、次節にてふれる記事とあわせて、ふたつに限られる。

活動を開始するにあたりまず「会」が掲げたのは、みずからが基盤を置く筑豊―北九州において「わが「おきなわ」」を発見していくという方法論的な課題であった。機関紙の創刊号に掲載された「わが『おきなわ』発刊にあたって」では、やや抽象的な表現ながらもその問題意識が次のように述べられている。

「わが「おきなわ」とは、このヴェールの奥に生きる一見グロテスクな世界なのだ。緑と太陽の都市を標榜しつづけてきた北九州の、緑と太陽とが共に煤塵に色あせていくように、「文化的」であるということが無惨にもつき崩されていく世界である。それは同時に、「わが北九州」であり、「わが筑豊」であり、「わが未解放部落」であり、かつ「わが職場」であり、そしていったい何と名づけるべきだろうか。

(…)

「おきなわを考える会」は、直接には沖縄を焦点に据えながら、広く「おきなわ」を考えていくサークルである。〈わが「おきなわ」〉は、そのサークルを中心としたパンフであり、何よりも多くの人々から支えられてゆく体のものである。⁽¹⁶⁾

最後の段落での漢字表記の「沖縄」と「おきなわ」の使い分けが、前者が地理的で具体的な地域としての沖縄を指すのにたいし、後者が地理的実体としての沖縄をより「広く」捉えていくという「会」の姿勢を表現している点でも、興味深い一文である。⁽¹⁷⁾では、「会」はなぜこのように「直接には沖縄を焦点に据えながら、広く「おきなわ」を考えていく」必要を覚え、これを「会」に共有される方法・姿勢として宣言したのか。同じ創刊号には「福岡県青協第3次沖縄派遣団有志」による四月二七日開催予定の集会のビラ文が転載されている。ここで、この有志は、青年団として沖縄に「派遣」された自分たちの「沖縄問題」への取り組み方を厳しく自己批判している。

「沖縄問題」が「沖縄問題」としてはありえず、それが本土における斗い（社会変革、体制打破の斗い）との連続性の中でしか語ることを許されない状況は「派遣」され「視察する」という第三者的立場のギマン性を告発するものであった。現地においては参加だけが問われていたのだ。／／総評代表団に「沖縄にきてもらわなくともよい」といった沖縄青年のことは、同時にぼく

たちの内なるものに対してもむけられたものであった。そのみにくさを拒否するためぼくたちのうちの数名は2・7に、立法院において坐り込みを行った。……この斗いの口火を消してはならない。⁽¹⁸⁾

このような時青年団の中で、沖縄問題を訴えるというあのスタイルにまづぼくたちは大きな疑問を感じる。ぼくたち自身の斗いの明確な方向性を抜きにして、ただ単に沖縄を訴えるというのは、沖縄の悲惨、苦しみ屈辱を安売りするだけではないのか〔。〕ただ単に訴えるだけではなく、斗い行動する中で訴えるということではなくてはならない。四・二七集会をぼくたちが提起するのはかかる立場に拠っている。⁽¹⁹⁾

あきらかにここでは、同時代の沖縄闘争をめぐる「沖縄に來なければ、沖縄闘争は闘えないのか」⁽²⁰⁾という、沖縄側からの告発が意識されている。集会に際して沖縄に派遣され、地元に戻ってからはその様子を現地報告として報告するという日本（本土）側の参加者に一種のルーティンとなっていた行動様式を、この有志は「みにくさ」という自己嫌悪的な感情を表明しながら批判している。同時に、「みにくさ」の次元にとどまることなく自主的に「立法院において坐り込みを行」い、また自分たちの足下で「斗い行動する中で訴え」ようとするとする点では自己批判の陥穽を潜り抜けようとしている

が、こうした姿勢を「会」もまた引き継ぎようとしていたといえる。

それでは「会」は、具体的にどのような問題にたいして「わが「おきなわ」を見出したのか。機関紙の紙面を通読する限り、「会」全体に共有された沖縄闘争への情勢認識などは明確でなく、施政権返還をめぐる評価にも文章ごとにバラつきがみられる。そのなかでも「会」のメンバーたちが共通して念頭に置いていたのは、筑豊―北九州を横断する下請け・孫請けの労働問題であった。以下、この点を詳しくみていこう。

一九五〇年代末から国策として展開された石炭から石油へのエネルギー転換は、全国各地の炭鉱を容赦のない合理化・閉山へと追いやっていった。日本最大の炭田であった筑豊も例外ではなく、「総資本対総労働」とも呼ばれた三井三池闘争がたたかわれた六〇年当時には約七万四千人いた労働者も七〇年の時点では約四千六百人に激減し、七三年一月には貝島大之浦炭坑の閉山に伴って筑豊炭田は事実上消滅する。⁽²²⁾ 職を失った炭鉱離職者とその家族は労働力流動化政策のもと、炭鉱離職者の再就職先の斡旋を目的に制度化された広域職業紹介などによって全国各地へと離散していった。他方、閉山地帯にとり残された人びとにとって選択肢は、失業対策事業で食いつなぐか、生活保護を受給するかでしかなかった。

こうした厳しい生活状況のもとで筑豊の失業者や若者たちの新たな労働現場となったのが、筑豊に隣接する工業地帯の北九州であり、労働者たちは日々筑豊から北九州へと移動していった。しかしな

がら、北九州の鉄鋼業界では正社員である本工と下請け・孫請けのあいだに歴然たる待遇格差が存在した。身分制とすら呼ばれていたこの格差は同時に現場の安全性にも直結しており、死亡事故を含めた労働災害が頻発する危険な現場を担当するのは主に下請け・孫請けの労働者たちだった。⁽²³⁾こうした実態は、『わが『おきなわ』』や、「会」もかわっていた九州活動者連合準備会の機関紙『九州通信』の紙面で度々とりあげられており、森崎がこの時期の評論で「流民」ないしは「流民型労働者」という言葉によって呼びならわしたのも、こうした下請け・孫請けの労働を転々としながら時に全国を周ってゆく労働者たちの姿だった。⁽²⁴⁾

それでは、この問題がどのようにして一九七〇年前後の沖縄闘争と結びつくのか。やはり機関紙上での議論からはこの点は明確ではないが、森崎の文章などを補足的に参照すれば、以下のような文脈が意識されていたことがわかる。すなわち、当時の沖縄では、全軍労（全沖縄軍労働組合）でたかう米軍基地雇用の軍労働者が、施政権返還にともなう日米安保再編の過程で整理解雇の危機に直面しており、全軍労の闘争は基地撤去と整理解雇反対をともに掲げる「生命線からの闘い」としてあった。そして、こうした過程で職を失っていく軍離職者たちが、施政権返還のちには日本（本土）へ安価な労働力として吸収されるであろうことが、当時の沖縄では容易に想像されていた。⁽²⁵⁾「会」が下請け・孫請け問題というみずからの足下の課題と沖縄闘争の行く末を重ね合わせることは、こうした文脈の存在において可能であったと考えられるが、この視点は沖縄の側でも一定程度共有されたもの

であった。次のような同時代の評論の存在が、そのことを示唆している。

解雇を通知された沖縄の基地労働者の立場に類似した先例を求めるとするならば、それはむしろ、特定の産業を中心に一つの地域社会を構成していた炭鉱離職者にみることができるのである。友寄全軍労書記長の口から「去るも地獄なら残るも地獄。戦うしかない」(一九六九年——引用者)十二月五日『朝日新聞』という六〇年の三池闘争を想起させるような言葉が語られているのは偶然ではない。おそらく全軍労闘争は、全駐労闘争の延長線上ではなく、三池闘争の発展形態として構築されなければならないであろう。⁽²⁷⁾

以上のような問題意識をもちながら、「会」は一九六九年一〇月に『沖縄列島』の上映会を北九州の八幡で開催し、監督の東陽一とともに、評論家の石田郁夫や琉球新報記者の近田洋一⁽²⁸⁾を招いた。その後は、上映運動の総括を経て、「会」の内部に「沖縄研究会」と「下請労働者問題研究会」を設置して両者のつながりをさらに探求する一方、七〇年六月には「安保粉砕・沖縄解放・下請け孫請け制度反対」をスローガンとした「会」主催の「北九州人民集会」を開き、集会後には北九州の工場地帯を練り歩くデモを敢行した。⁽²⁹⁾

これ以外にも、沖縄闘争への街頭カンパなどの活動が確認されるが、一方で「もともとこの「会」

は行動集団ではない^③」とされていたこともあり、個々のメンバーがかかわっていた運動や行動はあったにしても、「会」全体としての活動は機関紙上からは確認しづらい。そこでは、日常から「わが「おきなわ」を発見するという方法・姿勢の共有の重要性が一貫して強調される一方で、「会」のメンバーによる文章はときに過度に抽象的であり、現実の沖縄／おきなわとのかかわりは必ずしもはつきりとしにくいものが多い。そのため、当時の印象として「これがどうして「おきなわを考える」ことにつながるかを、全く把握できなかった」という周囲の見方があったことも不思議ではない^④。そもそもこの方法論には、現実の沖縄／おきなわでたたかわれる闘争との持続的な緊張関係が求められ、これを喪失ないしは弛緩させると、主観的にはすべてのことが「わが「おきなわ」」として無限に解釈可能となる危うさがあった。極論すれば、そこではなにをやっている——やっていないとも——「わが「おきなわ」」なのだという強弁も不可能ではなくなる。

そして、こうした議論の著しい抽象化とともに、機関紙の発行ペースも次第に遅くなり、七〇年六月に九号、七一年一月に一〇号、そして七一年七月に一一号が刊行されたのを最後に『わが「おきなわ」』は終刊する。施政権返還のその日を迎えることなく、「会」の活動は終わりを迎えたのである。

二 森崎和江の沖縄論

前節では同時代福岡の社会運動の趨勢を概観したうえで、森崎もメンバーの一員であった「会」の

活動とその終焉についてみてきた。そのうえで本節では、「会」での活動を足がかりにしながら敷衍された、森崎自身の沖縄論を具体的にみていきたい。

森崎が沖縄にふれる際には、まず第一に筑豊との比較という視点が据えられていた。そこでは、ともに地域全体が国家の政策に利用されてきた歴史をもち、独自に抵抗運動を築いてきたといえる筑豊と沖縄のあいだでの共通性と差異が意識されている。同時に、森崎はこれらを単なる時系列のもとに配置することには否定的であった。『日本読書新聞』が一九七〇年二月に紙面上で企画した「特集——沖縄全軍労」に「想像力の自律性はたたかいの靱帯か」を寄稿した森崎は、両者の差異を次のように強調している。

けれども全軍労のたたかいを、三池および崩壊した筑豊のとむらい合戦的に、あるいはそれらを越える七〇年の幕あげ闘争的にとらえることを私は自分にゆるすことができない。全軍労のたたかいは本土に於けるすべての抵抗運動・解放運動の延長線上に開花したものでもなく、それらと内的拮抗を持つことによって定着したものでもないからだ。

私が沖縄を筑豊との二重写しとしてえがいてしまうのは、前述した類似点そのものよりも、実は、その類似にかかわらず地域に固有に負わされた課題を思想化していく民衆の全運動が、沖縄と筑豊とでは比較のしようもないほどのひらきを持ったためである。⁽³²⁾

全軍労による基地撤去と整理解雇反対を同時に掲げるといふ困難なたたかいは、かつての大正行動隊による、合理化にあえて退職主義を貫くという逆説的な戦略を思わせるものもあるが、比較という同一の俎上に載せながらも、森崎は両者の安易な同一視を戒めることで、抵抗運動間の連帯を自明視するような立場を退ける。他方で、この比較という視点の力点は、同じ時期の別の文章では「沖縄における——引用者」その抵抗の層の厚さ、その意識密度の濃さが筑豊とつい比較されてしまうのである⁽³⁴⁾と述べられているように、あくまで筑豊の側に置かれていたことには注意が必要である。実際、「会」の機関紙四号に掲載された、森崎の最初の沖縄論となるであろう文章では、「小国の大国批判」というフレームのもと、筑豊／日本への批判者として沖縄が希求されている。

つまり、沖縄とは私たちにとって、歴代の批判者なのだ。沖縄の文化やその生活意識には、本土大國意識が欠落させているものを存続させ本土文化を拒否しているものが形象化しているのである。⁽³⁵⁾

沖縄に日本批判の型を求める態度は、後述する南島論のモチーフにも重なるところだが、それらと比較すると森崎の議論はここでより運動的な側面を押し出している。しかし、沖縄と筑豊が時系列的な配置をされないとしても、比較という視点において、炭鉱の閉山・合理化が進むなかで運動が崩壊していった筑豊の〈過去〉は、施政権返還後の沖縄を襲う〈未来〉を予感させるものとして捉えられ

ていた。実際、米軍の「基地機能を厳然と残したまま、施政権だけ本土にくりこむ」ということは、今まで分断されていたために圧縮され独自に高まっていた民意を本土が中央集権機構によって吸いあげて、残りかすには生活保護をあたえるということ⁽³⁶⁾」なのだとする森崎の予測は、「生活保護」を「沖縄振興計画」や「軍用地料」に置き換えれば、意味深長なものである。そして、それゆえに沖縄の「現在」のたたかいが森崎その人に「かつて流した血がさらに白けるほどの具体性として迫ってくる」⁽³⁷⁾とき、森崎は沖縄にたいしてなにを提起するのか。

再び「想像力の自律性はたたかいの韌帯か」に戻ると、次のような一文がある。

誤解を恐れずにいえば、沖縄の思想[〃]は、異民族支配によつて、屈折した部分にしかない。その屈折によつて独自の伝統を形成した。それを崩壊させることなく、どのような形で現代的開放に向かわせるか、ということが沖縄民衆のたたかいの命題である。(傍点、引用者)⁽³⁸⁾

解釈に苦しまないわけではない一節である。森崎ですら「誤解を恐れずにいえば」と断っている。そもそこでの「異民族支配」が米軍統治のみを意味するのか、それとも日米の二重の支配体制を意味するのかは判然とせず、そうである以上「沖縄の思想」がなにを意味するのかも判断は難しい。だが、ともかくこうした「屈折」による「独自の伝統」があるとして、これを「どのような形で現代

的開放に向わせるか」こそが沖繩に問われるのだと森崎が指摘するとき、その「現代的開放」とは具体的にどのようなようにしておこなわれるのか。

そこに、この時期の森崎が筑豊―北九州の下請け・孫請け問題を通じて課題としてきた、労働者間の格差と二重構造という問題が投影されていることは間違いない。それは森崎が大正行動隊以来の課題として、つまりは抵抗運動の普遍的な課題として捉えてきたものである。水溜真由美が筑豊時代の森崎の思索を「同化型共同性への批判」としてまとめたように、森崎は労働組合すらもつことがかなわない底辺の請負労働者の存在こそが大正行動隊の敗北が残した課題であると認識しており、そこではある特定の集団内部で培われた創造性が、その集団内に自閉することなく、別の集団（「異集団」や「異族」）にたいしていかに「開放」されるかが問われていた。次の引用には直接は沖繩の文字は現れないとはいえ、そこで求められた「思想的な出逢い」は実に重層的である。

支配権力とは観念ではなくて、私たちの体質を媒体として現象するところの社会的な諸機構である。この重層した現象形態をあらゆる機構に発見することが重要だ。（…）それは私たちの自律性が私たちの他律性をうちやぶる道であり、また、私たちの組織づくりが日本式国家ふうな内部構造をとらぬ道の発見である。

流民と組織労働者が産業構造の二重性を打破する連帯を生みだすことも、それをより生活の深部で地域青年団と共闘し得る態勢を作ることも、その思想性をつらぬくことで既成左翼が犯した体制内化を越え得る。私は在日朝鮮人との思想的な出逢いも、この路上においてしかありえないと考えている。それは世界政治状況の認識の共有では足りないのだ。⁽⁴⁰⁾

課題は単に筑豊だけでなく、沖縄もまたともに向き合うべきものであり、どちらか一方の課題に収斂されてはならないこと。森崎は「現代的開放」のなかにそのような意味を込めていたといえる。そして、このことを筑豊―北九州の側から言い直すとすれば、それは次のようになる。

沖縄を認識することは私たちにとっては、この北九州および筑豊という分離した労働者意識――それは身分差にすらなっている現状――の中に、具体的に躍動的な相互関係を生みださせる運動と別ものではない。⁽⁴¹⁾

これまでみてきたように、森崎の沖縄論とは沖縄と筑豊の比較を基礎にしながら、具体的には筑豊―北九州の下請け・孫請け問題への取り組みを通して両者を結びつけようとするものであった。そのうえで、その論の基本的な性格が抵抗運動のあり方を論じる運動論であった以上、森崎の沖縄論が

いつ終わりを迎えたかは分析上の重要な指標となる。

森崎にとってこの時期最後の沖縄論となる「沖縄・朝鮮・筑豊」は、雑誌『現代の眼』で一九七一年八月に発表された。一方で、「会」の機関紙の最終号（一一号）が刊行されたのは同年の七月であり、「会」の活動と森崎の沖縄論には、始まりと終わりのあいだにあきらかな時期的一致が見出せる。⁽⁴²⁾同時に、「沖縄・朝鮮・筑豊」は森崎が筑豊を取り巻く同時代の社会状況や抵抗運動にふれた最後の文章でもあり、このうち森崎は『奈落の神々』（一九七四）や『からゆきさん』（一九七六）といった著作に結実する形で民衆の精神史ともいえるべき歴史の掘り起こし作業に傾注していた。自身のスタイルを転換させるほどに「会」の終焉はエポックな出来事であったことが伺われるが、森崎はそれとともにみずからの沖縄論にも終止符を打ったことになる。そして、その過程で、「会」の活動やみずからの沖縄論について総括などがまとめられることはなかった。

この際、先に指摘したように、筑豊と沖縄を比較する力点があくまで筑豊の側にあったことなどを踏まえると、森崎の沖縄論は筑豊に主眼を置いた運動論であり、それゆえに沖縄への関心も時事的な側面が強かったのではないか、という疑問も成り立ちえる。この疑問が妥当か否かは一旦置いておくとしても、仮にそれが同時代の凡百の沖縄論と同様の時局的なものにみえたとすれば、森崎の沖縄論に近年の森崎研究や戦後沖縄研究が関心を注いでこなかった理由の一端は理解される。

また同時に、こうした運動論としての性格が、同時代の南島論が沖縄の思想家たちに幅広く受容さ

れ、かれらの思想の培養基となっていたのに比して、森崎の沖縄論が沖縄の思想家たちにはほとんど受容されなかった理由を示唆している。作家の島尾敏雄によって一九六〇年代から繰り返し書き継がれ、のちに谷川健一にも引き継がれることになったヤポネシア論は、島尾と岡本恵徳、川満信一、新川明との直接の交友をへて、かれらの反復帰・反国家論の重要なモチーフとなっていた事実は、思想史的にも広く知られている。⁽⁴³⁾ また吉本隆明が一九六九年に雑誌の連載上で発表した「異族の論理」も、その議論を首肯するか否かは別としても、それ以前から吉本が持ち得ていた思想家としての影響力とあいまって、同時代に沖縄で多くの議論を喚起することとなった。現在の地点から時間軸を大幅に遡り、古層の文化史において沖縄／琉球／南島から日本（本土）を相対化させていく南島論は、それ自身がもっていたイデオロギー性や島尾・谷川・吉本のあいだでの差異はあるとしても、その巨視的でありながらも微細な視点によって、狭義の政治的言語には不可能な時間軸や空間性を沖縄をめぐ⁽⁴⁴⁾る議論へ新たに挟みこみ、一種の触媒的役割を果たしていた。⁽⁴⁵⁾ 実際、自身が編者を務めた叢書『わが沖縄』の創刊にあたって谷川は、次のような形で当時数多に存在した「状況論」とは異なる立場にこの叢書シリーズを定位している。

いま何度目かの琉球処分を強いられた沖縄が、たとい政治的経済的にやぶれても思想的に勝つための「終わりにきたたかい」を開始するにあたって、沖縄の存在が日本人にとっていかなる意

味をもつかを、一切の状況論的な視点を排除してふりかえってみる必要がある。沖縄が日本文化の根源にかかわる主題を現存させていると同時に、日本民族にたいする最もするどい問いを発していることは誰しも否定することはできない。⁽⁴⁶⁾

とはいえ、仮に谷川がいうように、闘争の季節を迎えているからこそ沖縄については「一切の状況論的な視点を排除してふりかえってみる必要がある」としても、森崎の沖縄論のすべてが運動的な議論で占められていたわけではないことも事実だ。実際、反復婦・反国家論の記念碑的な著作として名高い叢書『わが沖縄』の第六巻『沖縄の思想』に、森崎その人が「民衆における異集団との接触の思想」（以下、「接触の思想」という文章を寄稿していた事実はさほど知られてはいない。⁽⁴⁷⁾ 混成的な民族構成をとりながら境界を自在に横断し東アジアの海を生きていった倭寇を題材に、民衆次元での異族間の「接触」の歴史をとりあげたこの文章は、倭寇と海の歴史を参照することで、近代国民国家に規定された人びとの境界感覚の相対化を試みていた。またこれ以外にも、沖縄／琉球と日本の二者関係だけでなく、朝鮮や与論島にも焦点をあてるなど独創的な論の展開をとりながら、同時に歴史書や歴史研究が丁寧参照されている点では極めて緻密な文章であったが、当時の沖縄論壇では黙殺されている。⁽⁴⁸⁾

しかし、森崎がこれ以外の沖縄論で倭寇の歴史を更に掘り進めることはなく、かわって——そして

最後に——登場したのが「沖縄・朝鮮・筑豊」での農耕論である。閉山後筑豊の社会状況や沖縄を取り巻く政治的・経済的動向への言及も一定の紙幅を占めるなど議論が多岐にわたって分散しているものの、この文章の中核的なテーマは沖縄の農耕社会評価にあった。森崎は日本（本土）ではすでに日常から労働の手触りが失われているとしながら、これとの対比で沖縄の農村共同体に着目する。その際、沖縄の農耕社会に日本の原初的な姿をみるような見方は、沖縄が天皇制をうみださなかった事実を軽視しているとし、沖縄に「アンチ天皇制感覚の在所」を見出す。森崎は沖縄に強固な共同体意識をみる傾向があったが、これを農耕社会と（反）天皇制に引きつけたのが「沖縄・朝鮮・筑豊」の特徴だった。ここで森崎がやや唐突にも農耕論を打ち出すのは、後述するように当時の森崎が与論島民の出郷の歴史を取材しながら、血縁に基づいた伝統的な共同性と労働現場での共働による共同性との相克に注目していた点にかかわる。血縁と共働の原理が一致していたかつての農耕社会が、沖縄にはいまだ根強く残っていると森崎は考えていたのだ。

そこには先にも少し触れたように農耕儀礼や習俗が、原初性をより濃く伝えたまま残っている。また工業社会への転換は、まだ見られていないと言える。つまり民衆の社会関係は具象的にも、⁽¹⁹⁾ 観念界でも農耕労働社会の構造を持っている。

だが、こうした評価は現実の沖縄の姿を取り逃がしている。米軍占領下の沖縄で戦後に進んだのは、米軍の強制的な土地接収による農業の衰退と、米軍向けサービス業などの第三次産業に偏った基地経済の構造であり、「工業社会への転換」が起こらなかったことで農耕社会が維持されていたわけではない。たとえば、先にふれた、森崎も寄稿していた『日本読書新聞』の「特集——沖縄全軍労」にルポルタージュ「怨念の渦巻く底点から」を寄稿した川満信一はそこで、米軍再編の最中で整理解雇の危機に立たされた軍労働者たちこそが、戦後に故郷の村々の農業や漁業の生業から離れ軍雇用に流れてきた「故郷なき流民の群」である現実を描き出した。全軍労がピケを張っていた際に出会ったという久米島出身の掃除婦の女性は、一八年間の掃除婦生活の末に「ナアもう、こんなに掌の皮も足の皮も柔らかくなって畠仕事も出来なくなった」と語ったという。

軍用地に接収されたり、あるいは売り払ってしまったって実際に帰るべき土を持たない人々が多いが、仮りに「生れ島」へ戻れば三反保内外の田畠がまだ残されているとしても、都市周辺の生活ですっかり「やわ」になってしまった手の皮、足の皮ではロクな仕事もできない。農作業や漁業の手つきもすっかり忘れてしまつて、もはや「生れ島」を失なつたこれらの人々は、すでに資本主義がつくりあげる故郷なき流民の群なのである。（傍点、引用者）⁽¹⁾

森崎の農耕社会評価は、端的には時代錯誤アナクロニズムだったことがわかる。とはいえ、当時の南島論にも森崎

と同様の時代錯誤的傾向がなかったわけではなく、こうした限界を森崎個人に帰することはできない。だが、近代以前の海の歴史を参照することで、近代的な境界感覚にとらわれることのない民衆次元での「出逢い」の可能性を示した「接触の思想」の触発性に比べれば、「沖縄・朝鮮・筑豊」での農耕論は過去と現在を無批判に重ね合わせることで、そこに生きてきた民衆の実像を取り逃がしている。そのことによって「接触の思想」という文章自体の価値までが打ち消されるわけではないが、議論として著しい後退となっていることは否めない。

なお、森崎が倭寇などの海の歴史から農耕社会へと評価の視点を移行させた理由は定かではないが、農耕論での誤謬は森崎が当時みずからは沖縄を直接訪れることがなかった点にもかかわっているだろう。森崎が沖縄を初めて訪れるのは施政権返還から五年が経過した一九七七年であり、森崎の沖縄論はあくまで筑豊から綴られたもので、書籍などの情報に依るという限定性を有していた。

以上の点を踏まえると、森崎の沖縄論は、それが運動論にのみ収斂される質のものではなかったとしても、一定の問題を抱え込んでいたことになる。森崎もみずからの議論が手探りであることを自覚していたとは見受けられるが、結果としてその「沖縄・朝鮮・筑豊」を最後に、森崎はみずからの沖縄論を発展させることはなかったのである。

三 節合と抵抗の地図

前節では森崎和江が敷衍した沖縄論を具体的にみながら、同時代の沖縄と日本の思潮を参照しつつ、その特徴と問題点を併せてみてきた。しかし、本節でみていくように、森崎の沖縄論の意義はその問題点と表裏一体なところにある。重要なのは、森崎の沖縄論があらかじめ想定された分析や論理をもとに組み立てられたものではなく、〈日常〉のなかでつくられていった点にかかわる。一節で言及したように、より構造的に考えるならば、山田彈薬庫問題や板付基地撤去はより明示的に沖縄闘争と結びつく類の課題であったが、森崎や「会」は筑豊―北九州を横断する下請け・孫請け問題という、自分たちにとってより日常的な問題を「わが「おきなわ」として設定した。では、下請け・孫請け問題と沖縄闘争との結びつきを、あらかじめ森崎や「会」は理解していたのか。

下請け・孫請け問題は六九年以前の段階でも森崎の文章に書きとめられている一方で、沖縄はそこに姿をみせていない。無論、伝記的な事実を踏まえれば、森崎は沖縄へのある種の親しみを子ども時代から抱いていたが、森崎が沖縄について語り出すのはこの沖縄闘争の時代からである。したがって、ここでは事実関係は逆転されて理解される必要がある。下請け・孫請け問題を「わが「おきなわ」の問題であると把握しえていたから森崎は沖縄闘争に取り組んだのではなく、森崎の別の文脈上での表現を借りるなら、筑豊と沖縄を「結びあわせんと」⁽⁵⁴⁾するその過程において、下請け・孫請け問題は「わが「おきなわ」として発見されるのである。

論理的には不確実にもみえるこの回路が、少なくとも森崎には必須のものであったと考えられるのは、徐々に緩和がなされていたとはいえ当時は依然として沖縄と日本のあいだには渡航制限があり、沖縄と日本の移動は十全には保証されておらず、またなにより森崎その人が二人の子どもを抱えるシングルマザーの〈主婦〉であったからである。一九七〇年に刊行した評論集『ははのくにとの幻想婚』の「あとがき」には、この当時の森崎の執筆の様子が語られている。

書斎らしいものに落着けない私は、これらの文章を、調理台兼用の大きな食卓の上で書いた。その食卓はしばしば労働者たちとの共食や討論の場で使われたから、卓上にひろげられた原稿は幾度も片付けられて家の中を持ち運ばれた。⁽³⁶⁾

時に「夜ふけの三時、四時頃まで」つづけられたこの日々の討論のなかで、森崎は文章を書き連ね、子どもを育てながら生計を立てていた。森崎は六八年には戦後初めて訪韓しており、後述するように七〇年には知人の紹介もあって与論島に取材に向くこともあった。だが、それらは旅費の工面や子どもたちの面倒などの条件をクリアしてはじめて可能なものであった。他方で、この時期の森崎は体調不良を抱えてもおり、筑豊と沖縄を自在に長期間かけて行き来することは当時の森崎には不可能であった。⁽³⁷⁾

限られた環境のなかで、筑豊に身を置きながらも、沖縄闘争に共闘する方法とはなんなのか。⁽⁵⁸⁾このとき、森崎にとっての闘争の舞台は自ずと日常的な次元に絞られ、かの女の自宅を訪れる労働者たちの抱える困難と苦闘のなかに身を置くことが、すべての始まりの場所となる。これは選択の範囲外のことであり、前節で指摘したように時に情報上の制約にもつながるが、それゆえにある種の発明、促しもする。それこそが、下請け・孫請け問題を「わが「おきなわ」として発見するという方法であつたのだ。

あの沖縄本島がまるごと無人島となって、基地がその欲するままに機能しているかのごとき悪夢を、私は私の住む筑豊の状況に見るのである。(…)

私はしばしば耳にする。「筑豊はほろびたのだから東京で仕事をなさい」と。また「なぜあんな筑豊にいつまでも残っている者がいるのだらう。職を探して都会へ出ればいいのに」と。(…)
それは沖縄へ対する本土の本音として、数年後の沖縄へかけられる言葉でもあるのだ。⁽⁵⁹⁾

施政権返還後の沖縄の〈未来〉を、筑豊の〈いまここ〉から透視すること。賭けられているのは、その「結びあわせん」とする実践を通じて、筑豊と沖縄を節合 articulation していくことである。また、それゆえそこでは、既知の方法に依らない新しい形での共闘が求められるともいえる。⁽⁶⁰⁾

この際、「わが「おきなわ」という言葉の意味もあらためて検討される必要がある。というのも、沖縄のあゆむ未来が筑豊の過去であり現在であるならば、それを森崎や「会」が〈沖縄の筑豊化〉と呼びならわすことも決して不可能ではないからだ。実際、この言葉を森崎が文章中に用いたこともあるが、それは一度限りのことである。〈沖縄の筑豊化〉という時系列が誤りでないとしても、森崎（と「会」）はこの言葉を恒常的に選択することはなく、むしろ、沖縄問題や沖縄闘争を我有化しているという誹りを免れないような、所有格の「わが「おきなわ」という言葉をあえて選択した⁽⁶⁾。そこには間違いなくひとつの政治があるが、それでは、不穏当な物言いですらあるこの言葉は、いかなる理由で選択されたのか。前出の「接触の思想」を、森崎は次のような文章で締めくくっている。

私事に及ぶが、私は北九州で労働者らと「沖縄^マを考える会」という小集団をもちあつてゐる。彼らが編集発行する「わが^マおきなわ^マ」というプリント刷りの機関紙がある。それはわが身のうちに沖縄の思想を発見すべく名づけられた。それを沖縄に持参した会員は、わが^マ沖縄^マとはけしからんというとなさの反応を受けた。まずそのように反射的に反応するものの中にこそ、沖縄は語られている。私はその反応の積極と保守の結合を沖縄共同体における民衆の対外的触手として受けたと思う。そしてその苦汁にみちた凝縮力の、その反作用を、沖縄が発する本土民衆への「わが本土」⁽⁷⁾として耳をすませたいと思つてゐる。

「わが「おきなわ」」は、沖縄問題の解決主体を日本側にナショナルライズすることで沖縄の運動の主体性を篡奪するような独善的な運動論ではない。また、沖縄は沖縄の、日本は日本の、それぞれの課題を闘おうといった分離主義的な運動論に落ちつくものでもない。「わが「おきなわ」」を発するとき、「苦汁にみちた凝縮力の、その反作用」としての「わが本土」が投げ返されること、そこに相互的な新しい関係性の可能性がうまれることに森崎と「会」は賭けていたのであり、したがってそれはひとつの呼びかけとしてあった。この呼びかけとしての「わが「おきなわ」」は、次のような森崎自身の問いを支える方法でもあった。

たとえば沖縄解放とは何か。沖縄県民を異族として認識し共闘する勇氣や根拠を私たちは持っているのか。その固有の歴史から本土との同祖同根的側面を抽出して共闘したり、あるいはその固有性のなかから共同体験とはなりがたかった歴史的・思想的側面のみを抽出して異質文化の独立へと追いつつ共闘と称したりする道以外の道を創造しうるのか。朝鮮民族に対しても。また階級内の他の原理を軸とした結集に対しても。

多くの渦をもちつつも流浪しはじめているその音が聞こえるのである。結論を急ぐべきではない。⁽³⁾

同化にも異質化にも与することなく、呼びかけのうちに新しい関係性をうちたてること。それは平

坦な試みではないが、その試行錯誤と苦闘のなかに「耳をすませ」て「わが本土」を聞き取ろうとするとき、そこではまだ名づけえない何かが始まりうるのだ。

ところで、「接触の思想」の内容については前節でもふれたが、この論考の重要性もまたその表面的な内容からだけでは言い尽くせない。そこに沖縄とともに記された朝鮮や与論島の存在は、それ自体が日常のなから沖縄闘争に取り組む森崎によってあらためて発見され、書き込まれていったものであるからだ。

森崎は一九七〇年五月、雑誌『月刊たいまつ』誌上で連載「与論島を出た民の歴史」を開始している。全一二回となったこの連載は、連載五回目より当時九州朝日放送でディレクターを務め、「会」のメンバーでもあった川西到との共同執筆になることが報告されている。先述の与論島への取材旅行も、与論島出身者たちの与論島への帰郷を取材する川西に同行する形でおこなわれた。七一年四月に終了したこの連載は、その後同タイトルで同年一〇月に単行本として刊行されるが、加筆修正を経た単行本版では、一冊の歴史書としての体裁を整えるためか、連載時には度々強調されていた取材に際しての森崎たちのモチーフについての記述が概ね削除されている。だがその削除部分にこそ、この七〇年という時期に与論島民の移住の歴史を森崎たちが探る意味が端的に語られている。次の引用は連載初回からのものである。

与論島からの集団移住者の苦闘は、この基本的意識構造が封建社会の中で、各地方とも地域的限定を受けて特異な形成をみている側面を（実はこれこそ民衆における生活意識の多様性として先取りすべきであったのだが）支配の側に占有されて、分裂支配の手段とされた点である。このことは近代化を経て今日の私たちには無縁にみえる。けれども、例えば沖縄問題が反権力共闘関係では収まりきれないものを私たちにつきつけてくるのはやはりその点であって、民衆は自ら、自分らの創造した集団のみならず、その相互関係の思想を思想化せねばなくなっている。

沖縄は七二年返還が、佐藤・ニクソン会談で決定された。支配権力は沖縄返還を維新後の同祖同根論を基盤にして、沖縄民衆がたたかいたったその自治力を消滅させ、その基礎の上に資本の論理を貫徹させてアメリカ側の理念および現実と日本のそれとを結合させようとしている。⁶⁴

この連載で森崎と川西が追求したのは、奄美諸島の離島である与論島から明治期以降、飢餓や債務奴隷からの解放のためにおこなわれた三池炭鉱やその積出し港の口之津への集団移住に始まり、満州開拓移民や戦後の引揚げにまで至る与論島民の移住の歴史をたどることで、「血縁」と「共働」、すなわち民族と階級の相克を叙述することにあつた。⁶⁵ 移住先で差別的な待遇や蔑視的なまなざしを受けながらも、血縁的な共同性を軸に集団性を維持していた与論島民は、他方で集団としては資本側に都合よく搾取され、時にスト破りなどに利用されもした。この歴史のなかでかれ・かの女らが抱えてきた

苦悩ともがきを、移住後も綿々と受け継がれてきた島の伝統的な祖霊信仰についての精神的叙述とあわせながら、一種の〈未発の階級闘争史〉⁽⁶⁶⁾として記したのが「与論島を出た民の歴史」であった。森崎と川西は、同連載（同書）を通して血縁（民族）による共同性と共働（階級）による共同性が互いを打ち消しあうことなく、両者の「結晶」⁽⁶⁷⁾がうまれえる関係性を想像／創造しようとした。

そして、先の引用は、この先に「沖縄解放とは何か」という森崎のあの問いがうつつなっていたことを指し示している。「自分らの創造した集団のみならず、その相互関係の思想を思想化」せねばならないという課題において、与論島民の抱え込んできた苦闘は沖縄の現在形の苦闘に通じていた。また付け加えるならば、別のある文章で森崎は、与論島民が経験してきた差別的な待遇は、筑豊―北九州における「産業構造としての下請・孫請制度」に引き継がれているだけでなく、労働者を取りまく「精神構造として」⁽⁶⁸⁾もなお「根のごとく現代日本の基底に巣くっている」とする新たな視点を提示している。こうして複雑に重層化された時間軸はある種の円環すら描き出しえるが、沖縄と与論島は〈日本人〉⁽⁶⁹⁾や〈琉球弧〉といったまとまりを前提とはしない、独自の節合をここで成していた。

そして、こうした与論島民の歴史が書き込まれもした「接触の思想」には、異質な民衆同士の「出逢い」の歴史を多層的に探る文章であるがゆえに、炭鉱の地下労働の現場で強制的に遭遇させられた日本・沖縄・朝鮮の底辺民衆の葛藤が召喚されもする。人びとを引き合わせた帝国と資本の暴力にたいする批判を前提にしたうえで、森崎は、一方では坑夫たち、とりわけ女坑夫のような「労働力を売

る以外に何一つ所有するものなく、戸籍すらないような者たちがもつとも深く直接的に朝鮮および沖縄と出逢って⁽²⁰⁾いたこと、他方では、民族間の分断は最終的に乗り越えられることなく朝鮮や沖縄、また与論島の民衆を抑圧するものであった事実も指摘する。こうした両義性は、民衆間の「出逢い」はアプリアリに一方から他方への抑圧に転化するわけではないというこの時期の森崎の信念を物語っている。更にここから文章は、まだ国境の概念すら曖昧であった中世の海を闊歩し、仮に取り押さえられても投降しその土地で生きていった倭寇を中心とする海の歴史を、国家や境界の自明性を相対化し突き崩すものとして呼び寄せる。⁽²¹⁾もちろん、朝鮮や倭寇（海）、そして与論島もまた、沖縄論を展開する以前から森崎の射程には捉えられており、すべてがこの時点から語られていったわけではない。⁽²²⁾だが、それらは森崎によって沖縄と筑豊とが節合されるなかで、あらためて召喚され書きとめられたものである。

この際、沖縄―筑豊―与論島―朝鮮―倭寇（海）をつなげていくその結び目は、東アジアといった概念や〈大東亜共栄圏〉といった帝国支配の裏返しとしてあるのではなく、さながら数珠つなぎのような連なりにおいて節合されたものののだが、これらは森崎によって描かれた特異なひとつの地図として姿を現すことだろう。より正確には、森崎による思索の足跡が、沖縄にかかわってひとつの地図を浮かびあがらせていく。この点で、森崎の沖縄論の核心にあったのはまさに地図作成法^{カルトグラフィ}の作法なのであり、それは既存の地図を読み換えていくヤポネシア論の想像力の作法とも大きく異なった。固定化

させられた場所を所与のものとして受け入れ線を引き入れるのではなく、場所どうしを新たな空間の関係性に取り結びながら、近代や中世という歴史的様相をも書き込んでもいく、ひとつの抵抗の地図がここには存在したのだ。⁽⁷⁴⁾

そして、この地図の先に現れるものが、森崎にとってのインターナショナルであったという事実とはとりわけ興味深い。「接触の思想」のある箇所では森崎は、現状のまま進めば施政権返還とともに「産業資本によって」沖縄の「島民は、分散され無機化されている本土民衆と共に日本産業の下部構造である請負業の員数へ編入されてしまう」事態を危惧する。⁽⁷⁵⁾そして、それに続く否定形の文言のなかに、森崎はみずからの「インターナショナルというものの感覚」を忍ばせた。

それによって私たち民衆は、接触の思想が生活文化集団間の相互性を獲得し、それを基盤に相互の固有性への不可侵の地点に至り、どうやらインターナショナルというものの感覚の基盤を体得する機会を、また失なうこととなってしまうのである。またというのは、アジアへの膨張政策によって朝鮮や中国と接しながら民衆はその伝統的な共同体感覚によって相手側を侵してしまつたためである。そして民衆はその民衆次元における罪を、或る思想の欠落の結果だと感ずることすらできていないためである。⁽⁷⁶⁾

自在に動き回ることの難しい日常のなかから沖縄闘争へと取り組みとうとすることで、森崎は図らずも、隔てられた立場や地理にある人びとが境界や分断のなかでいかにつながることができるかという、インターナショナルリズムの基本的な命題へと接近していた。それゆえ、森崎の抵抗の地図には、更に多くの土地や場所が書き込まれようとしていたことを、ここでは書きとめておきたい。⁽¹⁷⁾

おわりに

本稿では、一九六九年から七一年にかけ、森崎和江によって書かれた沖縄にかかわる一連の文章群を詳らかに検討し、断片的ともいえるその内容を再構成することで、筑豊と沖縄が森崎の手によっていかに節合され、またそのなかでどのような女の沖縄論が形づくられていったかをみてきた。それはなにかしらの分析枠組みや論理構造をもとにして書きあげられたのではなく、日常の次元をひとつの足がかりとして、筑豊と沖縄を結ぶつながりの回路の生成過程そのものを描きだす論であった。そして、そこから浮かびあがる抵抗の地図は、必ずしも意図して描かれたものではなく、また常に余白が残されてつづけていたという点で、〈未完の地図〉として存在していたといえる。

これらの森崎の試みは、異なる課題を抱えた別の土地や場所での運動・闘争との共闘につきまとう、課題とその困難を考える際にも重要な視点を示してくれる。森崎の沖縄論は、常に筑豊そして北

九州という具体的な場所から、沖縄とのつながりを結んでいくことを模索するものであった。森崎にとってつながりとは予め可視化されたものではなく、模索の積み重ねのうちに発明され見出されるものであり、構造的な視角や分析はこののちに現れるものだ。共闘や連帯もまたアブリオリに準備も設定もされるものではないが、それでもこれらを探求することそのものは、常に〈いまここ〉を深く掘り起こすことから可能であることを森崎は指し示していたといえる。この点は、現在形の日本（本土）と沖縄との関係性に取り組むうえでも有用であるだろう。

ところで、改めて考えてみれば、このような問いの立て方は——日本（本土）と沖縄では異なる動機を抱えていたとはいえ——〈沖縄〉それ自身を主題化することを追求した沖縄闘争の時代の知識人や思想家たちの沖縄論とは相容れないものであっただろう。二節で見たような南島論との関心のズレもさることながら、森崎の沖縄を見通す視角そのものが他の論者とは隔たっていたのであり、この隔たりこそが森崎の沖縄論を長らく忘却させてきたのではないか。こうした視点をもとに、より包括的にこの時代の沖縄をめぐる思想史を検討すべきところであるが、これは今後の課題としたい。

そのうえで、本文で記してきたように、一九七一年以降森崎は沖縄について多くを語ることはなくなる。森崎と「会」もまたここにひとつの運動的な敗北を迎えたのであり、地図が未完となったのはこの敗北によってでもあったという現実には冷静に見極める必要がある。その一方で、森崎の沖縄論を再構成する過程とは、未完の地図の足跡を追いかけることを通じて、わたしたち自身がその地図を引

き継ぐことでもある。このとき、わたしたちもまたすでに、「わが「おきなわ」というあの呼びかけのなかにとらえられていることを知るのだ。

【注】

(1) 主なものに、新城郁夫「沖縄を聞く——大江健三郎『沖縄ノート』」「沖縄を聞く」みすず書房、二〇一〇年、大野光明「復帰運動の破綻と文化的実践による沖縄闘争の持続——竹中労、ルポルタージュ、島唄」『沖縄闘争の時代1960/70』人文書院、二〇一四年、北山敏秀「大江健三郎『沖縄ノート』における歴史意識の交差——新川明の「沈黙」に吸引される言葉」『日本近代文学』九三号、二〇一五年、吉田裕「中野好夫と沖縄——「道義的責任」と主体化の論理」『年報カルチュラルスタディーズ』四号、二〇一六年など。

(2) 水溜真由美「『筑豊』を問い直す——大正闘争後の森崎和江」『『サークル村』と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版、二〇一三年。

(3) 山本真知子「出逢いからはじまる連帯の思想——森崎和江にとつての沖縄」『同志社グローバル・スタディーズ』一一号、二〇二〇年。

(4) 一九五八年、九州・山口のサークル運動の交流誌として創刊された雑誌であり、事務局は筑豊に置かれた。「集団創造」を旗印に忌憚のない相互批判を流儀とした。また森崎をはじめ石牟礼道子や河野信子、中村きい子といった女性の書き手が注目される契機ともなった。さしあたり松原新一『幻影のコミュニケーション——

「サークル村」を検証する』創言社、二〇〇一年を参照されたい。

- (5) ここでは、当時の様子を伝える一例として、岡本恵徳による上野英信への追悼文をあげておく。岡本恵徳「上野英信さんのこと」『駱駝』一六号、一九八八年三月。

- (6) 上野英信には名護の眉屋一族が歩んだ流浪の歴史から沖縄の移民史を紐解いた著作『眉屋私記』（一九八四年）があり、近年では復刊がなされている。また、二〇二一年五月には、市民からの寄付金などをもとに、名護市屋部に記念の文学碑が建造されるなど、再評価の機運が高まっている。谷川雁の沖縄論については、『谷川雁セレクションⅡ 原点の幻視者』日本経済評論社、二〇〇九年の第三部「九州／朝鮮／沖縄」に所収の各論考、および、同巻に寄稿された仲里効による解説「〔無の造型〕から〈虚数〉の海へ」を参照。

- (7) 当事者が同時代の記録として出版したものに、福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者——70年への思想と行動』三二書房、一九六九年がある。また、市橋秀夫「写真史料が伝えるベトナム反戦運動——1968年北九州反戦青年委員会弾薬輸送阻止闘争の記録」『日本アジア研究』一八号、二〇二二年も参照。
- (8) 事故の詳細とその後の九州大学内での運動については、『あの日あの時この時代』記念誌編集委員会編『あの日あの時この時代——ファントム墜落五十周年・さよなら九州大学箱崎キャンパス』花書院、二〇一八年が詳しい。また、以下のインタビューも参照。番匠健一・大野光明「ファントム墜落からハンバク（反戦のための万国博）へ——江藤俊一氏に聞く」『立命館平和研究』二二号、二〇二二年。

- (9) 前掲『あの日あの時この時代』では、板付基地の撤去が沖縄のさらなる基地強化を招いたのではないかと

いう、当時の九州大学の運動関係者による批判的な回想が複数収録されている。

- (10) 前出の『サークル村』から派生する形で一九五九年にうまれた女性たちの交流誌であり、文化運動や労働運動の男性中心主義を鋭く批判し、女性たちによる独自の思想と実践を追求したが、森崎はその活動の中心にあった。天野正子「差異を交流の契機へ」「『つきあい』の戦後史——サークル・ネットワークの拓く地平」吉川弘文館、二〇〇五年も参照。

- (11) 河野信子「基地の前に坐る——コッチアメリカ・ジャパン ソチラネ」『思想の科学』第五次一〇〇号、一九七〇年四月を参照。

- (12) 大野光明『沖縄闘争の時代1960/70』（注1参照）を参照。またここであげた事例は、同書の第三章「大阪のなかの沖縄問題の発見——大阪沖縄連帯の会を事例に」でふれられるものである。

- (13) 大正行動隊とは、三井三池闘争の敗北を乗り越えることを目指し、筑豊の大正炭坑で既存の労働組合とは別に結集された労働者による行動集団。大正炭坑の合理化計画にたいしては、あえて退職を選択し退職者同盟を結成することで、退職金獲得闘争に取り組んだ。退職者同盟の事務局を務めた河野靖好の自伝『大正炭坑戦記——革命に魅せられた魂たち』花書院、二〇一八年も参照。

- (14) なお、「会」の命名は森崎によるものとされる。前掲山本「出逢いからはじまる連帯の思想」三三一頁。

- (15) 水溜によれば、「会」が生まれる最初のきっかけとなったのは、曾山政光と村田久が『沖縄列島』の自主上映運動を雑誌『朝日ジャーナル』の記事で知ったことであったという。前掲水溜『『サークル村』と森崎和

江』二九一—二九二頁。

- (16) おきなわを考える会「わが『おきなわ』発刊にあたって」『わが『おきなわ』』第一号、一九六九年四月、二二三頁。

- (17) ただ、機関紙や森崎の沖縄論を通読する限り、「会」や森崎がこの沖縄／おきなわの表記に必ずしもこだわりのもっていたわけではなく、こうした表記上の戦略がどれほど意識的になされたものであったかは推測の域を出ない。

- (18) 福岡県青協第3次沖縄派遣団有志「4. 27沖縄集会」『わが『おきなわ』』一号、五頁。

- (19) 同上。

- (20) 新崎盛暉「復帰運動とその周辺」『世界』二七五号、一九六八年一〇月、二〇八頁を参照。

- (21) こうした現地闘争をめぐる沖縄と日本側の葛藤については、大野光明「ベトナム戦争下の沖縄闘争——ベ平連の嘉手納基地ゲート前抗議行動と渡航制限撤廃闘争」『沖縄闘争の時代1960/70』（注1参照）を参照（とくに、九二—九九頁）。

- (22) 高橋伸一『移動社会と生活ネットワーク——元炭鉱労働者の生活史研究』高宮出版、二〇〇四年、二八—二九頁。

- (23) 当時の北九州の下請け・孫請け労働については、深田俊祐『新日鉄の底辺から——下請け労働者の報告』三一書房、一九七一年や鎌田慧『死に絶えた風景——日本資本主義の深層から』ダイヤモンド社、一九七一

年が詳しい。

- (24) 森崎の流民への関心については、拙稿「流民のアジア体験と「ふるさと」という「幻想」——森崎和江『からゆきさん』からみえるもの』『女性学研究』二五号、二〇一八年の第一節を参照。

- (25) 川満信一「生命線からの闘い」比嘉豊光『全軍労・沖縄闘争——比嘉豊光写真集』出版舎Mugen、二〇二二年。

- (26) 波照間健「全軍労ストの流産をこえて強大な沖縄戦線の構築へ」沖縄研究会編『物呉ゆずど——沖縄解放の視角』田畑書店、一九七〇年、九七—九八頁。

- (27) 新崎盛暉「本土への挑戦——沖縄全軍労ストの位置」『現代の眼』一一卷三号、一九七〇年三月、一四二頁。

なお、この文章を含む同時代の新崎の単行本未収録の論考を再録した新崎盛暉『未完の沖縄闘争——沖縄返還日米安保10年間の発言記録集』凱風社、二〇〇五年では、この引用部分での「三池闘争」の語の直後に、亀甲括弧で「三井三池炭鉱でおきた労働争議」という説明が加えられている。この注釈は、二〇〇五年当時においてはもはや三井三池闘争の記憶が読者には自明のものでなかったことを物語っている。なお、当時の全軍労と三池労組のあいだでは実際に交流がもたれていた。この点については、両者のあいだで開かれた座談会の記録である「解放闘争と階級闘争——全軍労と「三池」が提起した孤立と連帯」『朝日ジャーナル』一二卷一〇号、一九七〇年三月八日、および、その経緯などが綴られている石田郁夫「三池の原点——沖縄・与論・三池をつらぬくもの」『展望』一三八号、一九七〇年六月を参照。

- (28) 近田はこののち、先に本文で記したように、『わが『おきなわ』』に連載記事を寄稿するようになる。近田と

- 「会」、森崎の邂逅については、拙稿「筑豊と沖縄をつなぎむすぶ」『越境広場』七号、二〇二〇年六月を参照。
- (29) この集会とデモの様子は森崎の「非政治的基底からの共闘」『現代の眼』一一巻九号、一九七〇年九月で詳しく報告されている。

- (30) 「おきなわを考える会定期総会」(文責・九州通信編集部)『九州通信』四号、一九七〇年一月、一一頁。

- (31) 坂口博「森崎和江の沖縄……」『おきなわを考える会』捨遣『敍説』一五号、一九九七年八月、一五五頁。

- (32) 森崎和江「想像力の自律性はたたかひの韌帯か」『日本読書新聞』一五三三号、一九七〇年二月一六日。

- (33) 注13参照。

- (34) 森崎和江「筑豊からの報告——日本の断層・69年から70年へ」『月刊社会党』一五四号、一九七〇年一月、一四八頁。

- (35) 「おきなわを考える——小国の大国批判」『わが「おきなわ」』四号、一九六九年七月、四頁。無記名の文章であるが、内容や使われている語句、文体などから森崎執筆のものと判断可能である。なお、この「小国の大国批判」というフレームがそれ以降の沖縄論で用いられることはなく、あくまで試論的なモチーフであったことには注意が必要である。

- (36) 森崎和江「筑豊から——労働の身分制を越えられるか」『月刊たいまつ』五号、一九七〇年一月、六頁。なお、この文章は、森崎の批評集『はのくにとの幻想婚』現代思潮社、一九七〇年に所収の際には、「労働の身分制を越えるために——筑豊からの報告」に改題されている。

(37) 前掲森崎「想像力の自律性はたたかいの韌帯か」。

(38) 同上。

(39) 前掲水溜『「サークル村」と森崎和江』第三部「森崎和江における「交流」の思想」を参照。

(40) 森崎和江「民衆的連帯の思想」『現代の眼』一〇巻一二号、一九六九年十二月、一〇三頁。

(41) 森崎和江「映画「沖縄列島」について」『フクニチ』一九六九年九月一七日。

(42) 森崎は施政権返還がなされた一九七二年五月に「民衆ことばの発生——沖縄植民地化の文化構造」を『月刊

百科』一一六号に寄稿しているが、その主題は言語論であり、状況的な言及はみられない。

(43) 小松寛「日本・沖縄」という空間——「反復帰」論における日本側知識人の影響」『北東アジア地域研究』一五号、二〇〇九年。

(44) ヤポネシア論を含む南島論のイデオロギー性については、村井紀『南島イデオロギーの発生——柳田国男と植民地主義』福武書店、一九九二年や田仲康博「他者のまなざし」『風景の裂け目——沖縄、占領の今』せりか書房、二〇一〇年を参照。ただし、島尾のヤポネシア論は、南島として琉球弧を眼差していく日本側からの視線を批判する視座をもちあわせてもいたとする、鈴木直子「島尾敏雄のヤポネシア構想——他者について語ること」『国語と国文学』七四巻八号、一九九七年八月も参照。

(45) とりわけ島尾のヤポネシア論が果たしていた役割については、東琢磨「きっかけとしての「ヤポネシア」『ユリイカ』三〇巻一〇号、一九九八年八月が重要である。

- (46) 「叢書のはじめに」谷川健一編『わが沖縄』（叢書『わが沖縄』第一巻）木耳社、一九七〇年（頁数記載なし）。
- (47) 谷川健一編『沖縄の思想』（叢書『わが沖縄』第六巻）木耳社、一九七〇年。森崎以外の寄稿者とタイトルは以下の通りである。新川明「『非国民』の思想と論理——沖縄における思想の自立について」、川満信一「沖縄における天皇制思想」、岡本恵徳「水平軸の発想——沖縄の共同体意識について」、米須興文「文化的視点からの日本復帰」、大山麟五郎「海の神と粟のアニマ——奄美のこころをたずねて」、小野重朗「海と山との原郷——南島文化二元論」。なお、当初は吉本隆明も寄稿予定だったとされる。
- (48) なお、同時代の沖縄で森崎の影響を公言していたのは唯一の存在に詩人の清田政信がいる。しかし清田による森崎評価は、清田の谷川雁への思い入れのうえになされているため、森崎が〈女性〉の思想家としてのみ捉えられる傾向にあった。この点については今後さらなる調査が必要である。
- (49) 森崎和江「沖縄・朝鮮・筑豊」『現代の眼』一二巻八号、一九七一年八月、七四頁。なお、この文章は森崎の批評集『異族の原基』大和書房、一九七一年に所収の際には、「アンチ天皇制感覚——沖縄・本土・朝鮮」に改題されている。
- (50) 屋嘉比収「米軍統治下における沖縄の高度経済成長」『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』世織書房、二〇〇九年を参照。
- (51) 川満信一「怨念の渦巻く底点から」『日本読書新聞』一五三三号、一九七〇年二月一六日。
- (52) 「沖縄・朝鮮・筑豊」には、「それでもいろいろな認識がいつもこんなぐあいに、後手にまわっていてもはや

手がつかない頃、ぼつりと何かが役にも立たずに落ちる」という吐露が存在する（前掲森崎「沖縄・朝鮮・筑豊」七五頁）。

- (53) 三〇年以上のちの著作で森崎は、植民地朝鮮での子ども時代、沖縄出身の教師が歌ってくれた沖縄民謡を「内地の唄」として聞いていたという体験を語っている。『いのちへの旅——韓国・沖縄・宗像』岩波書店、二〇〇四年、二二二—二三三頁。

- (54) 前掲森崎「筑豊からの報告」一四九頁。

- (55) 渡航制限を担保していた出入域管理制度については、岸本弘人「戦後アメリカ統治下の沖縄における出入域管理について——渡航制限を中心に」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』五号、二〇一二年を参照。また、ルポライターの竹中労は、当時の首相佐藤栄作の妻・佐藤寛子を雑誌『週刊読売』上で批判したことで、韓国へのビザ交付を拒否されただけでなく、それまで許可されていた沖縄渡航申請が一年半ものあいだ保留されたとしている。竹中労『琉球共和国——汝、花を武器とせよ！』三二書房、一九七二年、一九二頁。
- (56) 前掲森崎『はのくにとの幻想婚』（注36参照）三四〇頁。
- (57) これは当時、石田郁夫や竹中労、佐木隆三といった日本のジャーナリストやルポライターたちが果敢に沖縄の現地を取材し、沖縄社会のアンダーグラウンドな現実や、復帰協や教職員会といった復帰運動の大組織とは一線を画す、小規模だがよりラディカルな実践の試みを報告していたこととは、ひどく対照的である。

- (58) この問いについては白始真氏との対話から示唆を受けた。

(59) 前掲森崎「筑豊からの報告」一四八頁。

(60) 前節でふれた全軍労のルポルタージュのなかで川満信一は、軍労働者に立ちほだかる離職の運命に想いを馳せながら、筑豊の炭鉱離職者の姿を自身の文章に引き寄せるという稀有な視点を開示しており、この点では森崎や「会」の思考と強く共鳴していたといえる。前掲川満「怨念の渦巻く底点から」を参照。

(61) なお、本文ですでにふれてきている谷川健一の叢書もまた『わが沖縄』であるが、これは森崎と「会」が用いる意味での「わが」おきなわ」とは異なるものであった。「その強制された苦悩の人間的な高さにおいて沖縄は本土を打つ普遍性を所有している。(…)沖縄は、日本人のもつとも醒めた頭脳と熱い心臓をうばいつづけてきたし、これからもうばうだろう。そうした意味で沖縄を呼ぶのに「わが」という呼称を用いるのはそれ以外に適切な呼び方がないと考えるからである」(前掲「叢書のはじめに」(頁数は記載なし))。

(62) 森崎和江「民衆における異集団との接触の思想——沖縄・日本・朝鮮の出会い」前掲谷川編『沖縄の思想』二五四頁。

(63) 前掲森崎「非政治的基底からの共闘」七九頁。

(64) 森崎和江「与論島を出た民の歴史(第一回)」『月刊たいまつ』九号、一九七〇年五月、五〇—五一頁。

(65) 与論島民の移住の歴史については、南日本新聞社編『与論島移住史——ユンヌの砂』南方新社、二〇〇五年、井上佳子『三池炭鉱「月の記憶」——そして与論を出た人びと』石風社、二〇一一年なども参照。

(66) 『与論島を出た民の歴史』を階級闘争の書として読むという視点は、佐喜真彩氏に示唆を受けている。

(67) 森崎和江・川西到『与論島を出た民の歴史』たいまつ社、一九七一年、一九六頁。

(68) K・M「『三池』の残したものと下請制度」『九州通信』七号、二頁（発行年月日記載なし、一九七〇年六月と推測）。

(69) 沖繩の復帰運動において、日本と沖繩（アメリカ）との国境付近の島であった与論島は毎年四月二八日に行われていた海上集会の日本側の舞台であり、象徴的な場所であった。

(70) 前掲森崎「民衆における異集団との接触の思想」二三一頁。

(71) こうした倭寇への評価は、同時代の次のような記述とは対照的である。「五月十五日にむけて日本本土から、まことに様ざまな思わくを持った者らが沖繩にむかう。自衛隊の将兵から、土地投機でひともうけたくらむ連中にいたるまで、まことに多様な力がおしよせるさまは、あたかも「倭寇（わこう）」を思わせる勢いであって、それは沖繩に旅し、そこから本土日本をふりかえるのみでじつに明瞭（めいりょう）である」（大江健三郎「謝花昇と沖繩」④『朝日新聞』一九七二年四月二四日）。

(72) 森崎と与論島民の邂逅は、一九六〇年の三井三池闘争の支援の際に森崎が泊まらせてもらった社宅の一家が与論島の出身者であったことに遡る。詳しくは、単行本版『与論島を出た民の歴史』の「あとがき」を参照。

(73) そこには当然ながら流民という森崎の問題関心がかかわっていたとも考えられる。注24を参照。

(74) 地図と地図作成法をめぐっては Doreen Massey, *For Space*, Sage Publications, 2005（『空間のために』（訳：

森正人・伊澤高志、月曜社、二〇一四年）の批判的考察に多くを学んだ。

(75) 前掲森崎「民衆における異集団との接触の思想」二二八頁。

(76) 同上、二二九頁。

(77) 「沖縄・朝鮮・筑豊」のなかで、森崎はその地図のなかに東南アジアを書き込もうとしていた。「けれども資本の論理はいちはやく国境を越える。日本をとりまく後進地域といわれる韓国・台湾・東南アジアとの関連は軌道に乗り出した。沖縄の労働力は本土の大企業はもとより、独占資本との関連会社には、もはや魅力でなくなっている。若い労働力さえ家事の手伝いめいた市井人の生計補助員程度の職場しかない。そして効率の高い本土の労働力は、国外の工場の指導員格で、後進諸民族の農民（まだ工場労働者とはいいがたい彼ら）に接するのである」（前掲森崎「沖縄・朝鮮・筑豊」七二頁）。